

# 電気風呂の怪死事件

海野十三

青空文庫



井神陽吉は風呂が好きだった。

殊に、余り客の立て混んでいない昼湯の、あの長閑な雰囲気は、彼の様に所在のない人間が、贅沢な眠から醒めたのちの体の惰気を、そのまま運んでゆくのに最も適した場所であった。

それに、昨日今日の日和に、冬の名残が冷んやりと裸体に感ぜられながらも、高い天井から射し込む眩しい陽光を、恥しい程全身に浴びながら、清澄な湯槽にぐつたりと身を横えたりする間の、疲れというか、あの一昧放縦な陶酔境といったものは、彼にとつて、ちよつと金で買えない楽しみであつたのだ。

陽吉の行きつけの風呂は、ちやんと向井湯という屋号があつた。が、近頃大流行の電気風呂を取りつけてあるところから、一般に電気風呂と称ばれていた。

「電気風呂はよく温るね」などと、とにかく珍しもの好きの人気を博することは非常なも

のであつたが、その反対に、入るとピリピリと感電するのを気味悪がる人々は、それを嫌つて、わざわざ遠廻りしてまで他所の風呂へ行くといった様に、勢い、それは好き好きのことではあるけれど、噂で持ちきっていたものである。

では、陽吉はどうかというと、決してその電氣風呂が好きといふのではなかつた。ただ、元来無精な所から、何も近所にあるものを嫌つてまで、遠くの風呂へ行くにも及ぶまいじやないかといった点で、別には是非をつけてはいなかつたのである。

尤も、何時であつたか、彼の友人で電氣技師を職としている茂生といふのと一緒に入つた時、ひよいとした感じで、ちよつと不安を覚えたので、訊ねてみたことがあつた。

「どうだい、この電氣風呂つて奴は、入浴中に人間が死ぬ様なことはないものかね？」  
すると、茂生は、何か他のことでも考えていたのか、はつとした様な態度で、しかしこゝう答えたものだ。

「さあ、大体大丈夫だがね、しかしどうかした拍子で電氣が強くなると、心臓をやられることもあるだろうね。人間の中でも電氣に感じ易い人と、感じの鈍い人とあるものだからね。同じ人間でも身体の調子によつて、感じ易い日と、感じにくい日とがあるものだよ。とにかく、疲れ過ぎたり、昂奮していたり、酒を呑んでいたりにして心臓が弱っている時

には、電気風呂など止めた方がいいよ。そりや普通はそんなこと滅たに、いや絶対といつてもいい位、ありやしないがね。また死ぬかも知れないような危険なものを、許可しとく筈があるまいじゃないか、まあ、安心していいだろうよ」と。――

だから、今日も、彼は例日のように、いや、むしろ今日は進んでこの電気風呂へやって来たのだった。というのは、前夜、銀座あたりを晩くまでのそのそとほつつき歩いた疲労から、睡眠も思つたより貪り過ぎたためか、妙に今朝の寝醒めはどんよりとしていたので、匆々タオルと石鹸を持つて飛び込んで来たのだった。

めつきり、暖い午前なので、浴室には何時ものように水蒸気も立ち罩めてはいなかった。よつちやんと呼ばれる風呂屋の由蔵が、誰かの背中を流しながらちよつと挨拶した。

陽吉は黙つて石鹸と流し札を桶の上に置いて湯槽の横手へ廻つた。浴客は皆で四人、学生らしいのが湯槽に漬つていてだけで、あとはそれぞれ流し場でごしごしと石鹸を使つていた。由蔵が流してやつてゐる老人が、いかにも心地好きそうに眼を細くしてされるがままに肩を上下に振つてゐる。全くのんびりとした昼湯の気分が漲つていた。

陽吉は、そうした気分を未だ充分に感じられずに、ひよいと手拭を湯槽に浸した。と、ピリピリといやに強い感覚、頸動脈へドキンと大きい衝動が伝つた。何となく心臓の

動悸も不整だ、と思いつながら、肌をひろがる午前の冷気に追われて、ザブンと一思いに身を沈めた。熱過ぎる位の湯加減である。頤の辺まで湯に漬りながら、下歯をガクガクと震わせながら、しかも彼は身動きすることを怖れて、数瞬じいっと耐えていた。と、唐突、

「熱ッ」と叫びながら、遽かに飛び出したのはその学生らしい男であつた。忽ちに、湯槽の中は激しい波が生じて、熱湯が無遠慮に陽吉の背筋に襲いかかった。ブルブルブルと一竦みに飛び上つた彼は、湯槽の縁に手をかけて出ようとした瞬間、

「吁ッ！」

という叫びと共に、彼の体は再び湯の中に転倒してしまった。全身に数千本の針を突き立てられたような刺戟、それは恰も、胃袋の辺に大穴が明いて、心臓へグザツと突入したような思ひだつた。指先は怪魚に喰いつかれたような激痛を覚えた。

「た、救けて！　で、電氣、電氣だ。感電だ！」

ザアツと湯の波に抗つて、朱塗の仁王の如く物凄く突つ立つた陽吉が、声を限りに絶叫したとき、浴客ははじめて総立ちになつて振返つた。由蔵は垢摺りを持つたまま呆然と案山子のように突つ立っている。二人の職人風の伴は、それと見るより呼応して湯槽の

傍へ駆けつけて来た。

「おい。兄弟、手を、手を貸した」

「よし来た！」

向う見ずに、今にも湯槽へ飛び込もうとするのを見て、例の学生風の男が大声で制した。

「危い！ 待った待った。感電らしい。飛び込んだら、今度は君達がやられちまうぜ！」

「あッ、然うだった。危い危い！ しかし此儘見殺しが出来るもんじやない。何とか、

おい番頭さん、何とかしなければ——」

「電気の元を切るんだ。おい番頭君、早く電流を断つんだよ！」

学生風の男に云われて、由蔵は漸くあたふたと釜場へ通う引戸を押しして奥の方へ姿を消した。

バタバタと板の間を走る足音。カタコトと桶の転がる音など——女湯の客が、何か異常を知って狼狽しているらしいけはいだった。やがて間もなく、真蒼になった女房が番台から裾を乱して飛び降りて来るなり、由蔵の駆けて入った釜場の扉口で甲高い叫びを發した。

「大変です。お前さん、大変ですよお！」

続いて太い男の声で、

「電気を切ったぞお！」

と、再び由蔵が流し場へ戻つて来た。

「さあ、電氣は切りました」

「大丈夫だな。じゃ、早く——」

学生上りが、いらいらと促すのを、臆病そうに老人が尻込みした。

「ええッ焦れつてえ、もう大丈夫だといふのになあ。そおれ！」

と、職人風の一人が、見るに耐えかねたといつたかたちで、さつと勢い込んで両手を湯槽に入れた時、ドヤドヤと向井湯の主人や、下足の小供、脱衣場の番人のお鶴などが駆けつけて来た。

「由蔵どうしたんだ、いったい？」

主人はこの椿事に対して何等見当がつかないので、むしように怒りっぽく由蔵をきめつけようとした。

「どうもこうもねえ、感電で客が一人この湯ん中へ沈んじまったんだ。早く救け出さなきゃ死んでしまわあな！」と職人風の一人が叫んだ。



「え、感電？ そら大変だ、由蔵入れ！」

主人は仰山ぎようざんに驚いて、顎あごで由蔵へ命令した。が、由蔵はと見ると、只もうおろおろとしながらも、何か気になるらしく、一向湯槽へ飛び込む勇気を持つともせず、縁ふちへ掴つかまったまま、左右を見廻したり、肩を振ったりして埒らちが明かなかつた。

「ええ、意気地なし！」

むつとした語調で云い捨てるなり、学生風の男は人を待たずに飛び込んだ。続いて石鹼だらけの肉体を跳おとらせて、ザブンと荒々しく足を踏み入れた職人風の二人。彼等はもう必然的の労働の様に、妙に亢揚かうようした息使いで各々足の先で湯の中を探つて廻つた。泥沼に陥没かんぼつしかかつた旅人のように、無暗矢鱈むやみやたらに藻搔もがき廻るその裸形らぎようの男三人、時に赤鬼があばれるように、時にまた海坊主がのたうち廻るような幻妖げんようなポーズ——だが、それも極めて短い瞬間の印象でなければならぬ。

突如、

「吁こツ、此処こゝに有あつた！」

と、職人風の一人が両手をさあツと挙あげて頓とん狂きやうな叫きびを発した。と、同時に、冷水管を通す円い穴の向うで、「きやツ」という叫きびが弾はじかれた。——それは、先刻さつき狼狽ろうたいして

釜場の方へ飛んで行つた湯屋の女房であつた。彼女は、覗き穴へ当てた片眼の前で、余りにも唐突に職人の一人が声を発したので吃驚したのである。のけぞり反るように、逃げ腰に振り返つた途端、発止と鉢合せたのは束髪に結つた裸体の女客であつた。

「見ちやいけません。見ちやいけません。早くお帰んなさい」

前後の見境なく、女房はその女客を片腕で制して押し戻した。その女客は、手に何か黒いかさばつたものを持つているらしかつたが、此際そんなことは、女房に取つて注意を要すべきことではなかつた。ただ、その女客が黙つて元来た女湯の方へ行こうとするのにおつ冠せて、

「あの、女湯の方には変りはありませんでしたでしょうか？」

と問いかけた。すると、その女客は引戸に手をかけたまま、ちよつと振返つたが、

「いいえ、別に何とも……」

と、曖昧に答えてそのまま女湯の流し場の方へ入つてしまった。

その引戸が閉まると同時に、女房は何故か一抹の疑心を感じて、念のため女湯の方を見廻りたいと思つた。が、その時、男湯の方から主人の声が聴こえて来た。

「おい、早く蒲団を持って来い。おい、居ないか、由蔵、由蔵！」

女房は擾しやうらん 乱らんした頭で、裏口の扉ドアに錠じやうをかけると再び男湯の流し場へ駆けつけた。

陽吉の身体が上ったものらしく、其処では色んな人々が立ち騒いでいた。寒さも忘れ、恥部ちぶを隠す余裕も持てない数人の浴客、それに椿事と知って駆けつけて来た近所の人々や、通行人らしい見知らぬ顔の男達が、或あるは足袋たびを濡らしたまま、或は裾をまくったままで、わいわいと湯槽を取囲んでいた。

「おい、早く蒲団を持って来ないか。由蔵はどうしたんだ、いったいあ奴いづは何処へ行つちまったんだ？」

「あたしや知らないよ。交番へでも駆けてつたんじゃ、ないかね？」

「そんな筈はない。もう交番の旦那は夙とつくに見えてるんだ。由蔵に訊ききたいことがあるって、待つてるんじゃないか。ええ、それより早く蒲団を持って来いというに——」

いずれもむしように昂奮した口調で、こんなことを応おう酬しゆうしたのち、女房は返事も口の中でして奥の間へ飛び込んだ。押入から蒲団を曳ひきずり出すと、力一杯それを抱かかえて釜場の方へ引返して来た。と、其処にも男湯の方を覗き込んでいる近所の若衆が二三人立っていた。

「みなさん、お客様はもう死んでしまつたんですか？」

「助かるだろうというんですがね、まあ早く蒲団を持ってってやんなさい！」

だが、女房はその扉口とぐちに近く、警官や刑事らしい人々が数人、ひどく難しい表情で突立っているのを認めると、何故か心こころ怯おびえてゆく気にはなれなかった。

「すみません、ちよつと此処を開けて下さい！」

女房は、傍の人に声をかけて、女湯の扉口を頤こでしゃくつてみせた。

無言で開けられた扉口とぐちから一步、女湯の方へ足を踏み入れた彼女は、又も思わず「吁ッ！」と叫んだ。

その声にはつと反射的に此方こちらを向いた扉口とぐちの連中は、「おやッ！」と、ひとしく目を瞠みはった。

「お、女湯にも、大変です！ 女湯にも人が、人が……」

タイル張りの流し床に蒲団を放り出した女房が、こう叫んだのは、すべて計はかることの出来ない瞬間のことである。

男湯の方の出来事に注意を鳩あつめていた警官連や他の男達は、どつと、その声に誘われて女湯の方へ雪崩なだれ込んで来た。

司法主任の赤羽直三あかばねなおぞう氏の蒼白そうはくな顔が、何時の間にか交まじっていた。

「おお！ こりや兇器で殺られてる。みんな傍へ寄っちゃいかん！ 大変だ。君、急いで手配をして見張つて呉れ給え！」

彼は、さすがに昂奮の色を見せて誰に云うとなく叫んだ。と同時に、刑事らしい一人がバタバタと表口へ駆け去つた。

男湯と女湯との仕切板の上から、いくつも覗いていた顔は、一様にさつと筋ばつた。見るに忍びず、といったそれらの顔色が示す事件は、いったい何であつたのだろうか？——

女湯の白いタイル張りの床の上に、年の若い婦人の屍骸が俯伏に倒れていたのだ。いや、それよりも何よりも、一目見た程の人々の心に、最も強く映つたのは、その白いタイルの一面に、紅がらを溶かしような生々しい血糊がみなぎつていたので。そして、怖ろしいまでの苦悶の跡をみせて、その年若い婦人の裸体が不自然な姿態をその中に示しているのであつた。——

赤羽司法主任は、たつた一人でつかつかとその屍体に近づいて調べてみた。

女は、もはや夙うにこと断れていた。そして、左の頸と肩との附根の所に、鋭い吹矢が深々と喰い込んで刺つている。夥しい出血は、それがためのものであるらしい。が、その婦人の身体には、未だ幾分か温みが残つていた。肉附のよい、見るからに豊満な全身に亘

つて、まだ硬直の来きたしていないことが、誰の眼にも生々しい事件を想像させた。恐らく此の女は、男湯の騒ぎの最中さなかに殺されたものであろう。そう想う人々の面に、何がなし深い恐怖と不安が漂ただよい初めたのを、赤羽主任も一通り看取かんしゆする余裕を持っていた。

だが、見渡したところ、浴室の窓が開いている訳でもなし、吹矢を打ち込む隙間があるうとも思われなかった。と、赤羽主任の頭にさつと閃ひらめいたのは、由蔵が姿を見せないということである。

「君、ちよつと、釜場の上にある由蔵の部屋を搜索して呉れ給え。狭い梯子はしごで昇れるようになつている所だ」

部下の一人に耳打ちした赤羽主任は、次にも一人の部下に、容疑者ようぎしやとして由蔵の逮捕かぎらひ方並に非常線を張ることを、本署に電話するように命じた。

直すくに、その二人はそれぞれの役目に就つくべく其の場を去ると、赤羽主任は、向井湯の主人と女房を眼で呼び寄せた。

主人は、赭あから顔を全く恐怖で包んだまんま扉口とぐちの前列に立っていた。女房はというと、投げ出した蒲団の後に眼を据すえたまま口を開けて立ちつくしている。四圍あたりの人々がどうあろうと、そんな判別もつかぬらしく、ただ徒いたずらにその眼は執念しつこく女の屍体に注がれていた。

「君たち夫婦の中で、この女の顔に見覚えのある者はいないかね？」

赤羽主任の訊問に、はじめて我に返った兩人は、再び指し示されたその女の屍体に眼をやったが、答は横に振った首でなされた。

次々と、その場に居合せた程の人々は、順に訊ねられたが、口数少く、いずれも女の身元に就ては未知との答ばかりであった。

と、何を思ったか、低い、ややもすると隣の人にさえも聴き取れないような口籠り方で、女房が呟いた。

「……しかし、変だこと！」

「何？ 何処が変だね？」

赤羽主任の声に、一同は女房と共にはつと眼を上げた。そして、赤羽主任の眼が女房の言動に何事か関心を持ったらしいことに気がついて、一層緊張した沈黙が生れた。

女房は、飛んでもないことを云ってしまった、という様な不安を以て、まじまじと赤羽主任の眼を視返した。

「今、変だこと！ って云ったじゃないか？」

「ええ、でもそれは——」

しかし、女房は云い逃れることの無駄を知って、おずおずと口を開いた。

「いえね、先刻男湯さつきで沈んだお客の体が見つかつたとき、それがわたしの鼻の先なんですよ。わたし、びっくりしちやつて奥へ逃げ出そうとしたんです。すると、ちようどその時、女の人が一人、裸のまんま、わたしと衝突ぶつかつたんです。思わず、いけません、早くお帰んなさい——って、わたしが云いますと、その方、この女湯の方へ歸つてしまいました、その時もしやと思つたもんですから、私は、女湯の方は何ともありませんか、つて訊ねましたんです。すると、いえ、何事ありません、と云つて、そのまま此方こちらへ来た筈なんですのに——それで、今思い出したもんですから、ひよいと呟いたんですわ」

「ほほう、では君の見たという女は、此の死んでいる女客じゃなかつたかね？　よく見て御覽！」

赤羽主任にそう云われて、今度は眉を顰ひそめながら、女房は再びチラリとその方を見たが、「いえ、全まるつきり異ちがつてますわ。何しろうす暗いのと、上じょう気きしていたのとで、はつきり見ることも出来ませんでした、わたしの見た女の方は束髪たつかみだった様に覚えています。此のお客さんは銀杏いちょう返しがえしですものね、——ですけど、肉付きや、体の恰好など、似ていたと思えばそんな気もしますけれど……」



赤羽主任は、無残むざんにつぶされた女の銀杏返しの髪に視線を送った。——丸々と肥こえた頸く筋びすじに、血まみに塗れた乱れ髪が数本蛇へびのように匍はつてゐる、見るからに惨ざん酷こくな犯行を思わせずにはおかなかつた。

と、その時、赤羽主任の眸ひとみはパツと大きく見開いた。というのは、その今しも見つめていた女の頸筋から一寸程離れた肩先に附着してゐた血痕けつこんが、チラリと閃ひらめいたようだったからである。

「おやツ？」

と叫んだ時、チラツと再び、その辺の血痕は鋭く光つた。そして、同時に、その血は頸筋へかけてすうつと流れ出したではないか？ 思てわのずひら掌をを出して、赤羽主任はその上へ拡げてみた。と、まさしく、ポトリと音がして、赤羽主任の掌上てのうえには、一滴の血潮ちしおが、円え点を描いた。

「ヤツ血だ！」

一層頻ひんぱん繁ばんに落ちて来る血潮を受け止めながら、赤羽主任は反射的に天井を見上げた。それに誘われて傍の人々もひとしく高い浴室の天井に首を廻めぐらせた。

「やツ、あそこに、あんな、あんなものが——」

誰かが叫んだ時、一同の眼は同時に同じものを認めたのであった。

それは、高い高い、浴場特有の水色のペンキで塗られた天井であった。その天井の、ちようど女の屍体が横つてゐる真上と覚しい箇所に、小さな、黒い環が見えていたのだ。いや、黒いと思つたのは、実は真紅な環で、血の滲み出た環であつたのだ。そこから、ポタリポタリと血潮が、青白い女の肉体に落ちるのではないか？

打ち続く怪事に、人々の面は、今にも泣き出しそうに歪んだ。

赤羽主任は、唇をヒクヒクと痙攣させ、顚骨の筋肉を硬ばらせながら、主人に訊ねた。

「あの天井裏へ案内して呉れ！ 早くだ、何処から昇るんだ！」

が、主人は全く当惑した面持で躊躇した。

「ヘッ、ど、何処から上つたもんでしようかな？」

「自分の家じゃないか、落ついて考えるんだッ！」と、赤羽主任は、焦れつたそうに、低いながらも力強く詰問した。

「それが、あそこへは一度も昇つたことはありませんので……。ま、とにかく裏梯子をかけてみましょう。どうぞ、こちらへ」

周囲の人々の眼に送られて、兩人が奥へ通う扉口を出ようとした時、刑事の一人が慌だしく駆け込んで来た。

「主任、由蔵の室を取調べましたが、由蔵の姿は見当りません。色々調べてみましたのですが、押入の天井の板が少し浮いていたほかに、別に異常はありません。で、押入の天井板を押しにかけて上ってみますと、どうやら此の浴場の天井へ抜けられるんですが、驚いたことに……」

と、報告しながら、その刑事は天井を見上げたが、突然頓狂に叫んだ。

「吁ッ！ あ奴の血だ！ 由蔵が殺られてるんですぜ！」

赤羽主任は屹となつて、共に天井の血の穴を見上げたが、刑事の叫びを聞くより、

「うむ、人が死んでいたろう？ 男か女か？」

「男です！ しかも裸体です。どうも由蔵らしいと思われませんが、足裏が白く爛れていました」

「よしッ！ 直ぐ行こう、案内をたのむ！」

と、赤羽主任は、真先に立って裏口へ行こうとしたが、何事かに気がついたと見えて再び身を振り返って云った。

「だが、この女の身元だ。女の着衣を調べて見よう！」

赤羽主任は、あちこちに転つてゐる桶類を跨いで女湯の脱衣場へ行くなり、乱雑に散らばつていた、衣類籠をひとつひとつ探してみた。が、目指す女の着衣も誰の着衣も、一向に見当らない。

「おい、女の着衣が見えないぞ、箱を探して呉れ」

刑事達は、箱の扉を片つ端から開いてみた。が、どの箱にもそれは見当らなかつた。殺されてゐる女湯の客の着衣が見当らないなんて、そんなおかしい訳はある筈がないと、一同は一樣に不審の面を見合せた。もしや先刻の混雑に紛れて、誰かがその女の着物を掠めたとしても、足袋一足、湯文字一枚も残さぬという筈はなかつた。

「じゃあ、下駄はどうだ？」

赤羽主任は躍起となつて、番台横の三和土を覗いてみたが、その下駄も片方すら見当らないではないか？

「一体、此の女は何処から入つて来たんだろう？」

赤羽主任は脳髓の痺れるのを感じた。が、その疑問は疑問として、とにかく天井裏の屍体も、差当り放つては置けなかつた。

やがて、発見者の刑事を先頭に赤羽主任や刑事連は、釜場の梯子を上って行った。向井湯の主人も、命ぜられて兢々きょうきょうと一同の後に続いて昇って行った。

由蔵の部屋は、わずか三畳敷の小室こべやであった。西に小窓が一つあって、不完全な押入が設けられてあった。その押入の中には、柳行李やなぎこくりやら鞆たもとやらが入っている。そして、成程なるほど、天井の板が一枚めくられていた。一同はゴソゴソとその穴から天井裏へ抜けて出た。

懐中電灯の光芒ひかりが縦横に飛び動いて、四辺あたりの状態をそれぞれの眼に瞭はつきりと映して呉れた。そこは、上つて見ると、こうも広々としているものかと思われる程、ゆつたりとした天井裏であった。頑丈な棟木むねぎが交錯こうさくして、奇怪な空間を形かたち作つくっている。と、十間ばかりの彼方に、正しく俯臥まぶさせに倒れている屍骸しかいが認められた。

主人の証言によつて、それは些さの疑いもなく由蔵の屍体であると判明した。

赤羽主任は、殆んど迷宮とまごに途惑とまどつた人間のように、甚はなはだしく焦立いらだちながらも、決して検証おこたを怠おこたらなかつた。

由蔵の屍体は、女湯の惨殺体と同様に、咽喉のど笛ふエの処ところに鋭い吹矢ふきやが立っていた。そして、四辺あたり一面の血の海は、次々と発見された事件の衝動まはに麻痺まひされた一同の心に、只燃えつつある絨鍛じゆうたんの如くに映つた。

しかし、次に、一同は異様なものの落ちてゐることを発見した。それは筒状の望遠鏡と、もう一つは脚のない活動写真撮影機であつた。更に、犯人が兇行に使用したに違いない吹矢や、吹矢の筒も片隅の方に発見された。パンの食いかけ、蜜柑の皮、それらも決して忽かには出来ぬ発見物と見做された。

赤羽主任は懐中電灯を藉りて、由蔵の屍体の周囲を丹念に調べてみたのち、ちよつと首を傾げて云つた。

「おい、誰かちよつと手を借して呉れないか。この屍体の頸を左へ、四五寸ばかり動かしてみろんだ」

心得顔に一人が屍体の頭髪を掴んでズルズルと左へ曳き寄せた。と、赤羽主任は、吹矢の一本を取上げて、その尖端で由蔵の頭のあつた辺を探っていたが、暫くすると、コツンと音がして、ポカリと眼の前に一つの穴が開いた。

「これだな！」

赤羽主任は、その丸い穴から下を覗いてみた。果せるかな、眼眩を感じずる程遙かの真下に、先刻まで取調べていた女の屍体が横つてゐる。――紛れもなく、其処は女湯の天井裏だつたのだ。

やがて、赤羽主任は、その節穴ふしあなをふさいでいた血染めちぞの栓せんを、吹矢の先に刺して懐中電灯の光を借りて、じいっと見つめた。それは、決して単なる木栓や、材木の節ではなく、実に巧妙に作り上げられた蓋ふた様のものであつた。そして、その金属の蓋の真ん中を打ち抜いて、円いセルロイドの小板が嵌はめ込んであるものであつた。が、それも矢張り血潮に染つていた。

## 2

次から次へと、意外な事件の連続と、それにも増して奇怪な事実の発見に依つて、居合せた刑事連は、ひとしく驚愕きょうがくの眼まなこを瞠みはつた。が、誰よりも彼よりも、齒の根も合わない程愕おどろいたのは、向井湯の主人であつた。

自分の家の天井に、斯こうした油断のならぬ節穴ふしあながあつたことさえ、夢にも知らない事であつたのに、その上、誰が持ち込んだものか、望遠鏡やら、活動写真の撮影機やら、吹

矢やら、またパンの欠片かけらや蜜柑みかんの皮といった食物まで運ばれていた——など、何が何やら、彼にとつて薩張さつばり訳わけの判らないことであつた。しかも、日頃忠実であつて、深い信頼を懸かけていた由蔵よしぞうが、僅きんきん々の時間に、場所もあらうにこんな所に屍骸よこたわと化して横よこたわつてい

は！  
彼は、天井裏にペタンと坐つたまま、情ないのと恐怖とで涙に暮れていた。と、泣けて泣けて仕方がない程の氣持の中にも、何か異常を感じたのだらう、ひよいと立上つた彼は、今迄坐つていた足の下をぞろりと撫なでてみたのち、何かに触れて声を上げた。

「何だ何だ！」

懷中電灯の光線が、さつと飛んで来た。刑事たちの注視が一樣に其処そこへ集つた。

「やツ！ 電線だ、こりや電線だぜ！」

主人は、一条の細い電線の上に坐つていたのである。それが足の肉に喰い込んでいた痛みが偶然発見をもたらしたのである。

「電線！」という声に、一同は先刻さつきの感電騒ぎのあつたことを思い出した。そうだ、井神陽吉が男湯の中で感電して卒倒そつとうした事件は、今の今迄、恐らく皆の腦裡のうりから忘ぼうきやく却やくされていたのであらう。それほど、一同は異常に狎なれていた。それを今、電線の発見から、



再び一同の頭には関係づけられて考えられて来た。

赤羽主任は、つかつかとその電線の所在箇所しよざいかしよに近寄って色々調べてみた。と、それは蟻引きのベル用の電線で、この天井裏を匍はい廻まわっている電灯会社の第四種電線とは、全然別種のものであることが判明した。又、それは大して古いものではないという様なことも判つて来た。赤羽主任が、尚なほもその先を辿たどつて見ると、その電線の一端いったんは、電灯線の所謂いわゆる第四種線に絡からまつて由蔵の屍骸の傍に終つてい、他の一端を探つてみると、棟木むねぎの上に、ベルに用いるようなマグネットがあつて、更に下部かぶへ降りて男湯の天井を匍はつて電氣風呂の男湯の配線の中へ喰い込んでいた。専門外のこととて瞭はつきりしたことは判らなかつたが、とにかく、簡単ながら、男湯の電氣風呂へ、何かの仕掛けが施ほどこされていることだけは、誰にも首肯しゅこんされたのであつた。

赤羽主任の脳裡には、漸ようやく事件の綾あやが少しずつ明瞭になつてくるのを覺えた。そして、此の事件の犯人は、この天井裏に潜伏かく伏していて、望遠鏡と活動写真撮影機とを使用して、女湯の天井から、犯人の恋人でもあるらしい肉体美の女を殺し、その藻搔もがき苦悶くもんして死んでゆく所を、活動写真に撮影しようと思つたのもあろうか。つまり一種の変態性慾者である。そして、その犯行を遂とげるために、最初、男湯に強烈な電流を通じて、浴客の一

人を感電せしめ、その混乱から人々の注意が男湯の方に集っている機に乗じ、犯人はその女を吹矢で殺して、その目的である活動写真撮影を完成し、兼ねて恋愛の復讐か何かを遂行したものであろう。——と、これが、赤羽主任が匆々にまとめ上げた推理の筋道であつた。

赤羽主任は考える。——それから由蔵は、何かの異常に気がついて、此の天井裏に上つてみたが、逸早くそれと知つた犯人のために、物蔭から吹矢で射殺されたに違ひがない。それが証拠に、由蔵の屍体には、明かに格闘をした形跡が残っていないではないか。——だが、これだけではまだ解き足りない謎が大分沢山残されてある。

第一は犯人が一向遁げ出した様子がないことである。此の風呂場で感電騒ぎが起つたとき、向井湯の直ぐ向う側にある交番の警官が、バタバタと飛び出して来た浴客の女達のあられもない姿を認めて、彼女等を訊問したことに依つて早くも事件を知つて、時を移さず表口や裏口に手配をしたことが報告されている。感電事件に居合せた浴客の男達も、陽吉の手当している間に、警官に堅く禁足を命ぜられていた。後から飛び込んで来た近所の連中や通行人さえ、みんな留め置かれている。猫の子一匹だつて表へ出たものがないとしたら、犯人は必ず此の向井湯の中に、依然として現在も居る筈に違ひない。万一その

犯人が由蔵の室の窓から外へ飛び出したとしても、見張りの警官に認められぬということ  
はあり得ない。

第二に、由蔵が、何故なにゆえにこの天井裏に異常のあることを認めて、此処ここまで上つて来たかということである。いくら気が顛倒てんととうしていた場合とは云え、他の人間に知らせずに、こんな所へ一人で上つて来る筈はない。

第三に、最も不審なことと云えば、女湯で惨殺ざんざつされた彼の婦人の着衣も下駄も一物として発見されぬ事である。仮に当時の女湯の客で、手の長い人間か、狼狽ろうばい者が居たとして、その女の着衣を持ち出したとしても、足袋たびの片足や、湯文字ゆもじの一枚までも残さぬなどという大胆不敵な行動が、あの際出来るものでなく、下駄の無いことに至つては、もはやそんな生暖なまぬるい想像は覆えくつがされるべきことであろう。

最後に疑問として残ることは、当時数人居たと想像される、いや、居たに相違ない女湯の客が逃げ出す時、どうしてこの女が殺されたことを誰一人として知っていないのであるか。いくら女は気が弱いと云つても、その辺のことを考えると怪しむべき余地は充分に  
あろう。が、これも、殺された女が事件を他よそに悠々と落ついて、たった一人で何時までも湯槽ゆぶねに漬つかっているなり、流しているふりしていたと考えれば、幾分合理性も認められるが、

浴客中に、もしもその様に落つた女が一人も居らなかつた場合を考えると、天井裏に隠れて、かねて計画の機会を待つていた犯人が人知れず或る女を殺したり、活動写真を撮影したりすることも不可能となつて来るから、此の辺も尚不審である。

赤羽主任は考え疲れて、頭がフラフラするのを覚えながら、一同と共に再び階下に降りて来た。

由蔵の部屋から釜場へと梯子を降りている時、赤羽主任は、奥の居間から、湯屋の女房が茶盆を持つて出て来るのを見た。と、同時に、彼は、ハツタと、忘れていた或事に気がついた。先刻、女房が云つたことには、釜場の下で変な裸体の女に突き当つた。その女が「女湯の方は何事もない」と云つたのにも拘らず、僅か幾分と云わせずして、女の屍体が発見されたではないか。女が、女湯の方へ入つた時には、女の屍体はどうしても其処にあつた筈である。それなのに彼の疑問の女は何事も言わなかつた。ひよつとすると、その女が、惨殺された女の着衣や下駄を自分の身につけて、澄ました顔で表戸から出て行つたのではなからうか？ だが、もしそうだとすると、その女は一体何処から来て、彼女の眞実の着衣や下駄は何処にあるだらうか。仮に、その女が犯人だとしても、まさか女が裸体で天井裏にいたのもおかしいし、また女が女湯から活動を撮るなども変な話である。

——そう考えながらも、赤羽主任は、孰れにしろ、その惨殺された女の着衣と下駄を探すが、事件の解決に最も役立つものであることを知って、後ろに続いて来た部下の一人に命じた。

「由蔵の部屋の持物を全部洗ってみろ、女の持物が出て来るかも知れないからな」  
梯子を降りかかった刑事の一人は、そう云われて直に再び部屋へ取って返した。

やがて五分も経つたと思われる頃、その刑事は由蔵の部屋から顔を出して勢いよく答えた。

「主任、ありました。何だか、おかしなものが出ましたぜ！」

「ふむ、そうか、何だね？」と主任の声。

「ま、ちよいと来て御覧なさい！」

刑事は頼の辺りを歪に歪めて、いやらしい笑いを見せた。赤羽主任は云われるままに梯子を昇って行ってみた。

室の中央に投げ出された柳行李の中に、一杯女の裸体写真が詰まっていたのだ。それは主にサロンの安っぽい印刷になる絵葉書や、新聞雑誌の切抜らしいものばかりであったが、更にその奥の方からは、独逸文字の学術的な女の裸体研究書などが出て来た。が、そ

れにも拘らず、目的の女の着衣は部屋の何処にも見当らなかつた。

然し、斯うなると、由蔵に就ても余り軽々しく考えられなくなつて来た。何故なら、それらの持物でも判るように、由蔵は立派な変態性慾者であるに違ひなかつたからである。

暫くして、又刑事は押入の隅から望遠鏡のサックを曳つ張り出した。——赤羽主任の頭は愈々混乱して来るのであつた。……

と、其の時、釜場へやつて来た人間が、やあと声をかけた。それは、赤羽主任のよく知つてゐる警察医の山村であつた。

「御苦労さまで、どうも。所で赤羽さん、あの感電騒ぎをやつた井神陽吉という男ですな。大分意識も恢復して来たようですが、先生頻りに帰りたい帰りたいと言うのです。言つてきかせても解らないので閉口してますが、どうでしょうな、あんまりあの男の意志に逆らうと、心臓が昂進して悪いのですが、お差支えなかつたら、あの男を一応帰らしたらと思ふんですが——。ええ、もうそりや決して逃げられるような身体じゃありませんよ」

「じゃあ帰してやりましょう。警察の者を二三人付き添わしてやつて下さい。然し一応身元調べをすましたんでしような？」

「身元調べでは先刻注射の後で、前の交番の村山巡査にやつて貰つとききましたよ。村山君、

ちよつと先刻さつぎの調査を見せて呉れませんか？」

呼ばれて釜場へやって来たのは、制服の巡査村山辰雄であった。彼は、事件の最初から見張り番に当つて、一向犯行の経路も、捜査の経緯いきざつも知らないのであつた。

「村山君、他ではないが感電した男の身元調べをやって置いて呉れたそうですが——」  
赤羽主任に問われて、規律きりつてき的に「はい」と返事した彼は、懐中から手帖を出してしばらくめくつていたが、或る頁ぺいじを読み上げて報告しようとした。

「おつと、ちよつと僕にだけ見せて呉れ給え！」

云われて、村山巡査は、四圍あたりに湯屋の夫婦やその他役筋やくすじでない人間のいることを知つて苦笑しながら、その頁を開いたまま手帖を赤羽主任に手渡した。

と、見る見る赤羽主任の面には輝かがやくばかりの喜色みなぎが漲みなぎつた。

「これだ、犯人は判つた！」

「えッ、犯人が判りましたか？ あの、井神陽吉が、では、犯人なのですか？」  
キョトンと解げせぬ面持で、村山巡査は反問した。

「いや、然そうじゃない。樫田武平かしだぶへい、あの男に違ちがはない！」  
断乎だんことして云い放つた赤羽主任の顔を、事情の判らない一同は不審みづそうに瞠みめた。

「いや、有難う、村山君。君の手帖のお蔭で凶らずも犯人、いや有力な嫌疑者が判明した。感謝する！」

益々意外な赤羽主任の言葉、しかしそれはこうであった。

初め赤羽主任は、村山巡査の手帖を受け取った時、感電被害者の井神陽吉の身元を一見するのが目的であったことに間違はなかつた。が、それを見ようとして、凶らずもその調査項目の前に記されてあつた文字が、彼をして一道の光明を認めさせたのであつた。それは――

微罪不検挙（始末書提出）

活動写真撮影業及び活動写真機械及附属品販売業並にフィルム現像、複写業

榎田武平（二四歳）

（住所）

といった、今日の事件に関係なく記入された覚え書きであつたのだ。

赤羽主任は、それをチラと見るや、忽ちにして脳裡に蟠つていた疑問を一掃し得ることが出来たのだ。というのは、榎田武平なる青年の住所が、村山巡査の管轄区域内の者で



あること、その職業がこの事件の謎を解くに最も有力なものであること、それに微罪ながらも交番巡査に始末書を取られるといったような行状などからして、直覺的に犯人推定を試みたのであった。

説明を聞いて、共に五里霧中ごりむちゆうにあつた刑事連もひとしく同意見を陳べるに到つた。

だが、何にせよ、その樫田武平の身柄を捜査してみなければ、或は現場不在証明アなどの懸念けねんもあるので、色めき立つた刑事連は、赤羽主任の命を待つものの様にその面を仰いだ。

と、赤羽主任は、何故か悠然ゆうぜんと構えて急ぐことを欲せぬものようである。

「非常線は張つてある。本署へ行けばきつと捕つているに違いないよ！」

先刻さつきまでの陰鬱いんうつそうな顔色にひき代えて、また何と云う暢気のんきさだろう！

## 3

だが、赤羽主任の推定が眞実ほんとうであつたことは、一同が向井湯を引上げて本署へ立ち帰

つた時に判明した。

「主任殿、御苦勞さまでした。非常線にひっかかった怪しい奴は、みんな留置所へ打ち込んであります。そして、たつた一人全くおかしな奴がいるんです……」

一行の帰署を待ち構えていたもののように報告する一人の刑事の言葉を聞いて、赤羽主任はおつ冠せて云つた。

「……束髪の女装をした奴で、名は榎田武平とね、然うだろう？」

「おお、よく御存じで。此間一度、軟派の事件で始末書を取つた奴です」  
満足そうに同行の部下を顧た赤羽主任は、初めて愉快らしい笑みを浮べた。

榎田武平の取調べの結果、事件の一切は判明した。

彼は、かねて、若い女が苦悶して死んでゆく所を映画に撮ろうという、大それた野心を持つていたのだ。それは、多分に彼の変態性の欲望が原因したのであつたが、職業とする所の趣味道楽が、ひどく凝り固つたことも一部の因をなしていた。で、彼は種々と研究と計画を廻らした結果、それが夢でなく実現することが出来ることを発見した。それには、彼の行きつけの風呂向井湯という、電氣風呂を利用することが、最も容易な手段であつた

のだ。

まず彼は、日頃おさおさ怠りなく向井湯の内外を研究し、それに、特有の肉体美を備えた若い婦人を一人選んで、彼女の入浴の際、特殊の方法で惨殺しようとして計画した。

事件のあった日の暁、彼は自家の売品たるフィルムを一本と現像液を準備して、それに店にあつた小形撮影機を一台と、パンや蜜柑などの食料品、束髪の西洋鬘などを一緒に風呂敷に包み、向井湯の裏口へ赴いた。そして物蔭に隠れて種々と様子を窺つたのち、午前十時頃、由蔵の隙を窺つてその部屋から天井裏に忍び込んだ。彼が斯く忍び込むまでには、充分の用意と研究が積まれてあつたことは勿論である。彼は、先ず汽罐を開けて自らの着衣と下駄とをその中に投入して燃やし、由蔵の部屋で由蔵の着衣をそのまま失敬して天井裏に忍び込んだのであつた。

彼は、勿論相当の電気知識を備えていた。故に、男湯の方の感電を計画し、またそれを遂行するための技術上の操作は、十分間も要さずに易々と行われた。それが終ると、彼はかねて探つて置いた、由蔵の秘密の娯しみ場所たる、女湯の天井の仕掛のある節穴の処へ来て、由蔵が設置した望遠鏡の代りに、持つて来た撮影機を据えつけた。

やがて、時が来て、当日の生贄となつた例の女（後で判明したが、彼女はお照という

二十二歳になる料理屋の女で、その日はこの向井湯の近所に住む伯母の所を訪ねて来た者であった）の肉体に魅力を感じ、愈々計画の実現に志したのであった。

その時は正午少し前だった。女湯の客は、そのお照の他に、僅に三人であった。男湯の方は前述の通り、井神陽吉と他に四人、で、頃合いを計って、彼は男湯の電氣風呂に高電圧を加えた。果せるかな、手応えがあつて、井神陽吉が飛んだ犠牲となつたのである。それからのちは、少くとも表面だけの騒動は前述の通りであつた。が、女湯の客のうち、お照を除いた他の三人は、ひとしく上り際だったので、隣りの騒動を機に匆々逃げ去つたのであつた。が、お照はただ一人、湯槽の側で間誤間誤していた。というのは、女故の辱さが、裸体で飛び出す軽率を憚からせたのと、一人ぼっちの空気が、隣の事件を決して重大に感ぜしめなかつたものらしかった。が、何はともあれ、樫田武平にとっては究つて重大な機会であつた。

彼は用意の吹矢を取り出すなり、狙い撃ちに彼女の咽喉へ射放つた。果して、あの致命傷であつたのだ。

転げつ、倒れつ、悶々<sup>もんもん</sup>のたうち返る美人の肉塊の織り作す美、それは白いタイルにさあつと拡がってゆく血潮の色を添えて充分カメラに吸収された。が、十数秒の短い時刻

で、敢なくもお照は動かずなつてしまった。

だが、樫田武平は美事な成功に雀躍して、そのフィルムだけを外すと、そのまま逃走しようとした。が、その時であった。由蔵は、別の目的を以て同じこの天井裏へ上つて来たのである。というのは、彼は感電騒ぎを知るや忽ちにして警察の取調べがこの天井裏の電線に及ぶのを慮つて、其処は秘密を持つ身の弱さ、望遠鏡を外すために人知れず梯子を昇つて這い上つたのである。

当然、樫田武平と由蔵との両人が、高い天井の暗がりで見合うことになった。が、何分にも大きな声を出すことを許されぬ場合のこととて、互に敵視しながらも一言も云わず、必死と眼を光らし合つた。やがて、由蔵は、己が隆々たる腕力に自信を置いて、樫田武平の華奢な頸筋を締めつけようと襲いかかった。と、早くも吹矢は由蔵の咽喉深くグザと突刺さつたのであった。——急所を殺られてそのままこと断れた由蔵の屍骸を見捨てて、樫田武平は怖ろしい迄緊張した気持で変装に取かかった。かねて目論んで置いた通り、彼は咄嗟の間にも順序を忘れずに、女装の髪を被つた。

そして再び由蔵の部屋へ降りて、由蔵の着衣を脱ぎ捨てると、彼は裸体のまま右手にはフィルムの入つた黒い風呂敷を提げて、大胆にも梯子を伝つて釜場に降りた。そして女湯

の扉口へ行こうとした、ちょうどその時彼は其処で湯屋の女房とばったり鉢合せをしたのみか、ちよつと見咎められたのであつた。さすがに、これには彼もぎよつとしたが、いかにも柔い嫺々しい彼の体は、充分に心の乱れた女房の眼を欺瞞することに成功した。

そして、彼は、素早く女湯の扉口から中へ入つて、自分が殺したお照の屍体の側を過ぎ、脱衣場へやつて来た。それから先、お照の着衣をつけて、下駄を穿いて、何喰わぬ顔で見張りの警官にも怪しまれずに戸外へ逃走する迄は、難なく行われたことであつた。

が、如何に緻密の計画と、巧妙の変装を以てしても、白昼の非常線を女装で突破することは可なりの冒険であつた。

——樫田武平が捕縛されるに到つたのも、すべてこの最後の冒険に敗れたがためであつた。

さて、かくして怖るべき「電氣風呂」の怪死事件は、犯人の捕縛と共に一切闡明されるに到つた。

やがて、あのフィルムは、警視庁へ移送されてその犯罪捜査に携つた一同の役人並に片内主腦者の前で、たつた一度だけ試写された。

が、凡そ其試写会に立会った程の人々は、期待していた若き一婦人の断末魔の姿を見る代りに、ま白きタイルの浪の上に、南海の人魚の踊りとは、かくもあるかと思われるような、蠱惑に充ちた美しいお照の肉体の游泳姿態を見せられて、いずれ物言わぬ眼に陶然たる魅惑の色を漂わしていたものである。

何故ならそのフィルムは故意か偶然か、高速度カメラで撮られていたのである。





# 青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第1巻 遺言状放送」三一書房

1990（平成2）年10月15日第1版第1刷発行

初出：「新青年」博文館

1928（昭和3）年4月号

入力：tatsuki

校正：門田裕志、小林繁雄

2005年6月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 電気風呂の怪死事件

## 海野十三

2020年 7月17日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>